

第十六回 令和七（二〇二五）年度

神石高原町読書感想文コンクール

— 優秀作品集・総評 —

神 石 高 原 町
神石高原町教育委員会

神石高原町シルトピア
カレッジ図書館

《小学生三・四年生の部・最優秀賞》

宿題をわすれるって、大へん

神石小学校三年生 高石 七海……………1

《小学生三・四年生の部・優秀賞》

たった二度はこわい二度

油木小学校四年生 柳原 美波……………3

《小学生五・六年生の部・最優秀賞》

人生を心豊かに生きていくヒント

神石小学校五年生 竹安 のどか……………5

《小学生五・六年生の部・優秀賞》

自分の色の世界

油木小学校六年生 柳原 莉子……………7

《中学生の部・最優秀賞》

終わりになき旅

神石高原中学校三年生 小塩 清花……………9

《中学生の部・優秀賞》

宙をわたる、学びの光

三和中学校三年生 中原 冬生聖……………11

《 高校生・一般の部・最優秀賞 》

『君たちはどう生きるか』を読んで

油木高等学校一年生 田川 斗哉……………13

《 高校生・一般の部・優秀賞 》

『キノの旅』を読んで

油木高等学校一年生 高木 樹……………15

《 「黒い雨」の部・最優秀賞 》

『黒い雨』を読み継ぐ意義

中原 淳子……………17

《 「黒い雨」の部・優秀賞 》

想いを受け継ぐ

神石高原中学校三年 天野 一花……………21

令和七（二〇二五）年度 神石高原町読書感想文コンクール総評

審査委員長 山元隆春（広島大学大学院 教授）…23

《三・四年生の部・最優秀賞》

宿題をわすれるって、大へん

神石小学校・三年生 高石たかいし 七海ななみ

私が、この本をえらんだ理由は「本のタイトル」にびっくりしたからです。夏休みに家族で読書感想文を書く本を本屋でさがしていると、この本が目にとまりました。宿題をわすれると先生にすごくおこられると思うのに、表紙の子どもたちは、みんな笑顔で「どんなお話なのだろう」とすごく読んでみたくありません。

このお話は、主人公のゆうすけ君が宿題をわすれた言いわけをした時に、えりこ先生から「ウソをつくなら、すぐにばれずに相手が楽しい気持ちにならないとだめ」とアドバイスを受けたところから始まります。ゆうすけ君は、次の日は家にやってきた宇宙人と九九の練習会をやっていたという理由を考えてえりこ先生に伝えると、宿題をわすれたことをゆるしてもらうことができました。すると、友だちのりなさんやクラスのおんなも毎日交代で宿題をわすれるようになっていきます。「野ねずみの家にまねかれて、ごちそうを食べたりあそんだりした話」や「えんぴつとおにごっこをした話」、「計算ドリルの数字がうかびあがってダンスを始めた話」など、楽しい理由がいっぱいありました。

私は、この本を読んで「宿題をわすれるのはたいへんだな」と思いました。宿題をわすれる理由を考えるのに二時間以上かけて紙に書いてくる子どももいるため、「これなら宿題をやってきたほうがかんたんだな」と思いました。いっしょに本を読んでくれた父が、

「七海も明日は、勉強しなくていいよ。その代わりに、お父さんが楽しい気持ちになる理由を考えて教えてくれないか。」

と言ってきました。私は、次の日に一生けんめいに理由を考えました。「おじいちゃん gave くれた野菜とずっとしりとりをしていた話」「おばあちゃんと妹といっしょに本の世界をぼうけんしていた話」を考えて、仕事から帰った父に話しました。父は、

「楽しい話をいっぱい考えたね。毎日の勉強時間よりも長く考えているね。明日も、勉強することをわすれてみないか。」

と聞いてきました。私は、

「いや。明日からは毎日勉強するよ。勉強をわすれるよりも、勉強しているほうが楽だからね。」

と答えました。きつと、えりこ先生も父も私に勉強させたくて、クラスのみんなや私に理由を考えさせたのだと思います。頭ごなしに「勉強しなさい」と注意されるよりも、「理由を考えてきてね」と言われることで、「宿題をやってきたほうが楽だ」と、自分で気付くことができると分かりました。

私は、大人になつたら小学校の先生になりたいと思っています。えりこ先生のように、私も頭ごなしに注意するのではなく、色々な方法で、子どもたちが楽しく勉強できるような声かけをしていきたいと思いました。

＊ 「先生、しゅくだいわすれました」（山本悦子・著／童心社・刊）

《三・四年生の部・優秀賞》

たった二度はこわい二度

油木小学校・四年生 やなぎはら 柳原 みなみ 美波

「たった二度で・・・」何か変わることがあるのかなどぎ問に思っこの本を読み始めました。

地球の気温がたった二度上がっただけで、たくさん生き物の命があぶなくなったり、虫の大量発生が起こったり、というように、日常の生活にひがいが起こるということが書いてありました。そして、私たちは、いろいろな植物、動物と永遠に会えなくなるかもしれないそうです。このようなことが起きているのは、地球温暖化という病気にかかっているからです。だから、私たちにできることを改めて考え直すことができるお話でした。

私がこの本で一番心に残ったのは、ゴマファザラシと会えなくなるかもしれないということです。ゴマファザラシが子どもを産んで育てるじょうぶな流氷がとけ始めて、シャチがそのうすい流氷を割って、ゴマファザラシの赤ちゃんはもちろん親まで食べてしまうからです。

私も水族館で見たことがあるゴマファザラシが地球上からいなくなると思うととっても悲しくなります。気温が二度上がると、生き物の種の最大三十パーセントが地球から永遠に消えてしまうかもしれないそうです。三十パーセントということは、一気にたくさん種類の魚や鳥が消えてしまうかもしれないと思います。三十パーセントの中に人は入ってしまうのかなど不安になります。

ニュースでは今年七月の平均気温はいつもの年より約二度上がったと言っていました。新潟では、米がかわってしまったのでかりとってすたということや、お年寄りが熱中しようになつて、自宅でおかれて亡くなられたということもニュースで言っていました。

この二度で私のおじいちゃんとおばあちゃんも野菜や米作りで困ったそうです。川は魚の背中が見えるくらい水が少なく、田んぼに水が来なくて、ひびが入ったりナスがかわれたりおじいちゃんやおばあちゃんの体もしんどくなったそうです。

「もうこれ以上、地球が病気になるないように、熱が出ないように、手当てを

していかないといけません」と本の最後に書いてありました。こんな大きな地球なのに、小さな私が手当てをすることができののだろうかとき問に思いました。それで、調べてみると私にもできそうなことがありました。それは、もっと多くの野菜を残さず食べることです。

植物性食品を育てることは温室効果ガスが少なくすむし、食べ物を残してその食べ物がくさるとかんきょうに悪いガスが出るそうです。他にもリサイクルや節電もできます。そして、声をあげることも大切だと書いてあったので最後に声をあげて言います。

「地球の気温が二度上がると、地球でくらす生き物みんなの命があぶなくなる。植物も動物もきみもわたしも！」

＊ 「たった2℃で…」(キムファン・著／文童心社・刊)

《五・六年生の部・最優秀賞》

人生を心豊かに生きていくヒント

神石小学校・五年生 竹安 たけやす のどか

このお話は、母と四人の姉妹が、戦地にいる父の無事を願いながら、様々な困難を乗り越えて、それぞれ成長していくお話です。

姉妹は、限られたお小遣いを出し合ってお母さんにクリスマスプレゼントを買ってあげたり、お父さんのお見舞いに行く電車賃を髪の毛を売って作ったりと、貧しさに負けず力強く家族とともに生きていきます。時には、姉妹の間のけんかやハプニングが起こります。それでも、お互いを思いやる気持ちで解決していくようになり、姉妹の心の成長も描かれています。

私はこの物語を読んで、お金や物に囲まれた贅沢な暮らしより、貧しいながらもお父さんやお母さんなどから、たっぷりの愛情をもらってそれぞれが感謝しながら心豊かに暮らしていくことがずっと幸せだということに気が付きました。私たちがくらししていく日々は、楽しいことや嬉しいことばかりではありません。面白くなかったり、傷ついたりすることがしょっちゅうあります。そのたびに、悲しい気持ちになったり、腹を立てたりして、八つ当たりしたり、機嫌を悪くしたりしてしまいます。

私は今まで、友だちに話しかけても返事がなかった時、無視されたら腹を立てていました。それは『若草物語』の最初の方で、姉妹が「貧しいからつまらない」「貧しいから不幸だ。」と、言っていたのと同じです。友達が返事をしてくれなかったとき、腹を立てる前に、「私の声が聞こえなかったのか。」「私の言葉の意味が分からなかったのか。」「私何か悪いことをしていたか。」「今どんな返事をしようか考えている途中なのか。」などと想いを巡らせることが大切だと思います。

また、朝ごはんがおにぎり一個だとしても、「ハムエッグやミートボールはなののか」と不機嫌になるよりも、「このおにぎりができるまでにたくさんの人たちの愛と苦労が詰まっている。ありがたくいただきます。」という考え方ができれば毎日幸せを感じながら過ごせると思います。つまり、物事を単純に受け止めて感情的になっていると、面白くないばかりになってしまいうけど、物事はいろいろ

ろな見方ができ、それに対して人それぞれにいろいろな感じ方、考え方があると知っていることが大事なのだと思います。

これからの人生を心豊かに生きていくヒントをこの物語が教えてくれました。姉妹が繰り広げる暮らしの中の出来事から、「失敗は必ずする」でも、「考えて、努力して、行動して、その失敗を解決していく」そして、「その失敗を成長していく力に変えていく」その大切さも学び取ることができました。

これから私も、失敗しても落ち込んで助けを待つのではなく、自らじっくり考えて行動していききたいです。今はまだおさない「若草」だけど、姉妹のように成長し、心豊かに暮らしていききたいです。

＊ 「10歳までに読みたい世界名作 若草物語」

(ルイザ・メイ・オルコット・著／学研プラス・刊)

《五・六年生の部・優秀賞》
自分の色の世界

油木小学校・六年生 柳原 莉子
やなぎはら りこ

『ぼくの色、見つけた!』題名の中にある「ぼくの色」って何だろう。自分にも、自分だけの色があるのかな、と疑問に思いこの本を読みました。

この本の主人公、信太郎は、赤系の色が見えない色覚障害です。三年生の時に書いた似顔絵で唇の色を茶色に塗ってしまい、同学年の子にいじられたこともありました。また、お母さんに必要以上に心配されて、ストレスが溜まっていきましました。

信太郎は五年生になり、ある日おじいちゃんの家でゴツホの絵画を見つけました。そのゴツホも色覚障害だったと聞いて、信太郎は新しい世界が見えてきました。信太郎にとつての「自分の色」「世界の美しさ」とは何なのかを見つけていくお話です。

私が一番心に残っている場面は、愛犬サブとの散歩中に信太郎の中で、何かが目を覚ました瞬間です。「世界が変わった? いや、そうじゃない。世界はこんなにも美しかったのに、今までのぼくが知らずにいただけだ。見ようとさえしなかったんだ。目の前に広がる、やさしくて、やわらかな世界。」この信太郎の言葉から、私が今まで当たり前のように見てきたこの世界が美しく見えてきました。私は今まで自然のことを景色として見てきた気がします。しかし、この本を読んで、自然が美しく、一つ一つが生きてるように見え、「自分なりの世界」が一つ増えたと感じます。

ところで、私には好きな絵本があり、見るたびに強い思いが伝わってきます。実はこの絵を描かれた人は色覚障害を持っており、この人にしか見えない世界があるのでは、と思います。同じように色覚障害の信太郎だからこそ見える世界の美しさがあり、それを教えてもらった気がします。美しいこの世界のことを、私も見られていなかったことに気づかされました。

もう一つ心に残っている場面があります。それは、しばらく学校を休んでいた信太郎が教室の窓から虹を見つけた時です。「教室から見える虹は今日も五色だ。でもぼくの虹はそれでもいいかも。ぼくはシャンと胸を張った。」という場面で

す。

自分の色覚障害があんなにもいやだった信太朗が、それを長所と思えるところがすごく誇らしくて、うれしくて思わず微笑みました。信太朗は「自分なりの世界」を見つけたのだと思います。私も信太朗のように、自分の短所を長所と思える、自分のことを誇りに思うことができる、そんな自分になりたいと思えるようになりました。誰もが持っているはずの「自分の色」。信太朗は、多くの人との出会いを通して世界を見る勇氣を持てたのだと思います。私もたくさんの人と接し、たくさんの方の色を知り、たくさんの方のことに挑戦し、「自分の色の世界」を見つけていきたいです。

* 「ぼくの色、見つけた！」（志津栄子・著／講談社・刊）

《 中学生の部・最優秀賞 》
終わりなき旅

神石高原中学校・三年生 小塩 清花
こしお さやか

なぜだろう。この本を読んでいるときだけ、いつもとは違う感覚がした。本の世界に深く引き込まれていく。現実世界を一時的に忘れ、まるで自分がその状況になったかのように感じる。今までいろんな本に出会ってきたが、こんなことは初めてだった。

私がこの本に出会ったのは、今年の夏。学校の図書館で偶然見つけた。インパクトのあるタイトルと、表紙に写る女性。その女性の名前は「クルム伊達公子」。世界で活躍した日本の元女子プロテニス選手。六歳からテニスを始め、ボールを追ってコートを走るだけで楽しかった彼女は、十八歳でプロになり、世界ランキング四位までのぼりつめた。しかし、勝つことにこだわって、プレッシャーに押しつぶされそうな毎日。いつの頃からか、彼女はテニス嫌いになってしまった。二十六歳の頃、彼女は引退してしまった。

三十七歳の春、もう一度世界で挑戦することを決めた。その背景には二つの出来事があった。一つ目は、彼女のパートナーであるマイクが、ずっと「公子がテニスをする姿を見たい」。そう願ってくれていたからだった。しかし、この歳で大丈夫なのか、馬鹿げていると思われるのではないか。彼女の中で決心が定まらず、ためらってしまった。でもマイクは、「チャレンジしたいなら、楽しめばいい。人がどう考えるかなんて関係ない。結果がどうだろうと、以前のキャリアが消えるわけではない。やることに意味があるよ」と言ってくれたのだ。この言葉で再び世界で挑戦することの決心がついた。二つ目は、がんの闘病をしていた父親を励ますためであった。父ががんを宣言されたのは二〇〇〇年。彼女はすぐに、少しでもいい病院を探そうと必死になった。それから七年間、父の闘病生活が続いた。彼女は父に直接、もう一度世界で挑戦することを報告しに行った。父はすごく喜んでくれた。そして、それが最後の会話になってしまった。父は本当に精神的にも肉体的にもしんどかったにもかかわらず、諦めることなく、病に何度も立ち向かっていった。その父の姿を思い出して、「私も負けていけない」と思えたのだ。このチャレンジは、父が運んできたもの。絶対に手放してはいけない。や

ると決めた以上は、最後までやり通す。彼女の心に再び火がついた瞬間だった。私はソフトテニス部に所属していて、先日、引退試合があった。私にとってのベストパフォーマンスとは、迷いがなく、自分のテニスができること。そして、何よりもテニスを楽しむこと。自分の力を出し切って、最高のパフォーマンスができてこそ、その先の欲として勝ち負けがある。たとえ負けたとしても、全力でやり切ったと思えたら、悔いなく、笑顔で終われる。それが、私にとって本当に楽しいと思える瞬間なのだ。

私は高校に行ってもソフトテニスを続ける。目的は、もっと強くなって、良い成績を残すことと、彼女と同じく、好きなことをして人生を楽しむことだ。私の両親は、好きなこと、得意なことを、いつだって思いっきりやらせてくれた。そのおかげで私は今、自分の好きなこと、やりたいことがはつきりしている。だからこそ、自分の決めたことは自分で責任をとり、出来る環境にあるのなら、精一杯頑張ろうと思った。

この本を読む前は、自分の好きなことができて当たり前、自分の人生なのだからできて当然のことだと思っていた。しかし、この本に出会って、好きなことができることは、両親だけでなく、家族や友達、先生、コーチなど、たくさんの人に支えられているからであり、それは決して当たり前ではないことが分かった。だから、出来る環境にあるからこそ、絶対に諦めてはいけない。「自分」を諦めさえしなければ、人はいくつになっても成長し続けるのだ。

不安や怖さはつきもの。覚悟を決めてまずは動き出してみる。そうすれば、思わぬ可能性の扉が開く。まさかという能力がどんどん花開く。もうダメじゃない。まだまだ行ける。

人生は終わりのない旅をしているようなものなのだ。

＊ 「進化する強さ」 (クルム伊達公子・著／ポプラ社・刊)

《 中学生の部・優秀賞 》

宙をわたる、学びの光

三和中学校三年生・中原 なかはら 冬生聖 とうま

伊与原新さんの『宙わたる教室』を読み終えたとき、私の心には、夜空に瞬く無数の星々のように、温かくも力強い光が灯った。東京・新宿の片隅にある都立高校の定時制。夜の静けさに包まれた校舎へ集まる、様々な過去を背負った生徒たち。彼らが理科教師・藤竹先生の指導のもと、科学部で「火星のクレーター再現」という壮大なプロジェクトに挑む物語は、単なる青春小説や科学小説の枠をはるか超え、現代社会における「学び」の真髄、「居場所」の尊さ、そして人間が再生していく過程の美しさを鮮やかに描き出している。

この物語に登場する生徒たちは、誰もが一度は社会のルールから外れたり、心の傷を抱えたりしている。例えば、二十一歳で自暴自棄になっていた岳人、幼い頃に学校に通えなかったアンジェラ、病のために学びを諦めていた佳純、そして戦後の混乱期にその機会を失った七十代の長嶺さん。彼らは昼間の社会では「負け組」とみなされがちかもしれない。それでも、夜の定時制高校の門を叩き、「学びたい」という純粹な渴望によって、彼らは再び光を見出そうとする。特に火星のクレーター再現という、地球上では困難を極めるであろう科学的挑戦に、彼らが真剣な眼差しで取り組む姿には、大きな衝撃を受けた。それは、過去の失敗や年齢、社会的立場といった制約を乗り越え、未知の世界に情熱を傾ける人間の本質的な輝きを浮き彫りにしていたからだ。

伊与原新ならではの緻密な化学描写は、この物語の大きな魅力の一つだ。火星のクレーターが形成されるか、そしてそれを地球上で再現するにはどんな科学的アプローチが必要か、詳細かつ分かりやすく描かれている。砂粒の選び方から落下の速度、衝突の角度、さらには空気抵抗や重力の調整といった、専門的な知識が丁寧に解説される度に、私もまるで彼らと一緒に実験室にいるような臨場感を味わえた。しかし、この作品の本当の魅力は、科学の正確さだけではない。科学的な探究の過程で、登場人物たちが互いにぶつかり、助け合い、自身の知識や経験を出し合うことで、一つの目標に向かってチームとして成長していく人間ドラマが、より深く描かれている点にある。彼らは、失敗を繰り返しながらも決して諦めず、データとにらめっこし、時に夜遅くまで議論を交わすことで、単

なる知識の習得を超えた「生きる力」を培っていくのだ。

そして、私がこの作品で最も心を揺さぶられたのは、定時制高校という「もうひとつの教室」が、彼らにとつての「希望」そのものであったことだ。昼間の学校生活に馴染めなかった者、社会で躓いた者、あるいは一度は諦めた学びを再開した者。それぞれの理由で集まった彼らが夜の教室で「宙」という壮大なテーマと向き合うことで、自己肯定感を取り戻し、新たな自分を発見していく。藤竹先生は、知識を一方的に教え込むのではなく、生徒たちの興味を引き出し、彼らが自ら考え、行動する機会を与え続けた。まさに、それは宇宙を「わたる」ように、自由で、制約に囚われない学びの形であった。この「宙わたる教室」は、生徒たちがそれぞれ抱える心の傷を癒し、社会の繋がりを再構築するための、かけがえない「居場所」となったのだ。

『宙わたる教室』は、私たちに多様な「学び」のあり方を提示するとともに、どんな状況に置かれても、人は学び、成長し続けられるという力強いメッセージを送っている。年齢や過去の境遇に関わらず、情熱を傾けられるものを見つけ、ともに進む仲間と出会うことで、人生は何度でもやり直せる。そして、科学という普遍的な知の探究は、時に私たちの内面を映し出し、人生の意味を問い直すきっかけを与えてくれるのだと、この作品は教えてくれる。夜空の星が、どんな闇の中でも光り輝くように、この物語の登場人物たちは、自らの力で未来を切り開き、それぞれの希望の軌跡を描き出していったのだ。

私もまた、この感動的な物語から、新たな一步を踏み出す勇気をもらった。自分の興味の対象を掘り出すことで、異なる背景を持つ人々と協力すること、そして何よりも、人生のどんな局面においても「学び」を諦めないこと。

伊与原新が描いた『宙わたる教室』は、現代社会に生きる私たち全員にとって、夜空に輝く一筋の光となるだろう。この素晴らしい物語を、ぜひ多くの人に手に取ってもらい、彼ら自身の「宙わたる教室」を見つけてほしいと心から願っている。

* 「宙わたる教室」(伊与原新・著／文藝春秋・刊)

《 高校生・一般の部・最優秀賞 》

『君たちはどう生きるか』を読んで

油木高等学校・一年生 田川 たがわ 斗哉 とうや

吉野源三郎さんの『君たちはどう生きるか』を読んで、私は自分の生き方について深く考えさせられました。この本は、コペル君という中学生の少年が、日々の出来事や人との関わりを通して、人生や社会について学び、成長していく物語です。物語の合間では、おじさんが一つ一つの出来事の意味を深めてくれます。私が特に心に残ったのは、人間関係についての章です。コペル君が友人を裏切ってしまいひどく落ち込む場面があります。自分の弱さや卑怯さに気づき、涙を流す姿に、私は強く共感しました。

私たちも日常の中で、時に自分を守るために誰かを傷つけてしまったり、後から後悔するような選択をすることがあります。コペル君のように、自分の過ちと向き合い、そこから学ぼうとする姿勢はとても大切だと思いました。

また、おじさんのノートに書かれていた「人間はパンのみにて生くるにあらず」という言葉も印象的でした。私たちは、食べ物やお金のような生活のためのものだけで生きているのではなく、人としてどうあるべきかという価値観や誇りも大切にして生きていかなければという意味だと感じました。今の社会では、どうしても効率や成果ばかりが重視されることが多いですが、自分の信じることや正しさを持って行動することの方が、長い目で見て大切なのだと気づかされました。

さらに、この本は、考えることの大切さを繰り返し伝えていきます。おじさんは、コペル君に何かを一方的に教えるのではなく、自分で考えて答えを見つけなさいと促します。これはとても重要なことだと思います。今の時代、インターネットで簡単に答えが手に入りますが、本当に大事なものは、その答えをどう受け止めて、自分の中でどう活かすかだと思います。そのためには、やはり自分の頭で考える力が必要です。

『君たちはどう生きるか』というタイトルは私たち読者一人一人への問いかけです。この本を読み終えて、「私はどう生きるか」と自分に問いかけたとき、まだはつきりとした答えは見つかりませんでした。でも、自分の行動や考えに責

任を持ち、人との関わりを大切にしながら、誠実に生きたいと思いました。

この本はこれからの人生を考える上で大切なヒントをたくさん与えてくれました。大人になってからもまた読み返したい作品です。

＊ 「君たちはどう生きるか」(吉野源三郎・著／マガジンハウス・刊)

《 高校生・一般の部・優秀賞 》
『キノの旅』を読んで

油木高等学校・一年生 高木 たかぎ 樹 いつき

私がこの『キノの旅』という本を読むのは実はこれが九回目になります。初めに読んだのは中学校三年生の一学期でした。中学校の朝は読書をする決まりがあり、私はこの本を読む前は図書室に置いてある借りられる漫画ばかり読んでいました。先生に注意され、小説を読むように言われました。注意された日の昼休憩、図書室にある小説で、面白そうなものがないか探しました。そして、ある分厚い本を手に取り、読んでみました。テスト問題の文章すらまともに読むことの難しかった私が、いきなり分厚い本を読んだので全くといっていいほど内容を理解することが出来ませんでした。

そのあと帰宅し、家の書齋で、長期間読めてなおかつ理解の簡単な小説を探しました。探している途中、この前弟が小説を読んでいたのを思い出し、弟に場所を聞いてその本を読みました。

これが『キノの旅』との出会いでした。

この本は文字が多いのに私でも内容が理解できる読みやすい本でした。今回この文章を書くという事で、改めて読み返すことにしました。

この本は短編連作の形で綴られる人間キノと言葉を話す二輪車ヘルメスの旅の話です。さらにこの本の他にも複数、巻があり時系列がバラバラになっていてどの巻のどの話から読んでも内容が理解できるようになっています。

私はこの本を読んで、初めて文字だけの作品の面白さに気づきました。小説はこんなに面白いんだと思い、この作品以外の作品も読んでみましたが、これを超える作品はありませんでした。

私は特にこの本の「人の痛みが分かる国」という話が好きです。この話に出てくる国は機械が仕事をしてくれて食べ物も豊富でとても安全な国でした。そして暇を持て余した人たちは頭脳を使ういろいろな事に挑戦するようになりました。そしてある時、人間の脳の研究をしていたグループが脳の使っていないところをうまく開発すれば人間同士の思いをテレパシーとして直接伝え合うことが出来るということを見ました。そして国中の人々はこの研究を褒め称え、脳

を開発する菓を完成させ、すべての国民がそれを飲みました。それにより伝わらなくて良い考えがほかの人に伝わり考えが筒抜け状態になってしまい、人は考えが読み取れなくなる距離をとり生活する状態になった国に主人公たちが行くという内容でした。

この話が好きな理由は相手の考えていることが全て分かってしまうことが良い状態ではないということをお教えるからです。

この本を読み、文章の面白さを学びました。おかげで、最初読むのをあきらめた分厚い本を、読むことが出来ました。この本は私にとって、とても大きな存在なので何度も何度も読み返しました。

私は今回あらためて読み返したことで衝撃を受けました。それはこの本がライトノベルに分類されることです。短編で構成されている本ですが、各話にテーマがあり、色々な社会（民主主義・独裁・軍国など）の社会構造の問題点や登場人物の葛藤が、それらの国に属さない旅人である主人公がその国を通り抜けることで浮き彫りになります。純文学の定義を調べてみましたが、この作品はライトノベルの枠を超えているのではないかと思いました。

* 「キノの旅」(時雨沢恵一・著/KADOKAWA・刊)

《「黒い雨」の部・最優秀賞》
『黒い雨』を読み継ぐ意義

なかほら
中原 淳子
じゅんこ

「こんなしんどい本の感想文、いったいどうやって書いたのか……」
三日かけて、やっと『黒い雨』を読み終えたとき、ぐったりしながらそう思った。実は、本文、三十五年ぶり二度目の読書感想文なのである。

当時は、まだ高校生。登場人物の誰にも心を寄せることができなかった。しかし、今回は違った。読解力が増し、広島市内の地理に明るくなったことで、脳内に地獄が広がった。八月六日の重松や矢須子の手記を読みながら、彼らと行動を共にした。紙屋町が火葬場と化したことに衝撃を受けた。そして何より、矢須子よりも重松に近い年齢となり、七人の甥姪をもつおばとなったことで、自らも含め、生活者たちに非情さや醜悪さがあることを痛感した。読んでは引き込まれ、精神をえぐられた。正直、今生、読み返すつもりはない。

『黒い雨』の中で印象的な言葉は、「辟易」だ。これは、作中ではたった一度、重松が矢須子の実父と話し合う場面で使われている。「辟易」とは、「うんざりする」ということだ。しかし、この場面まで重松がうんざりするようすはない。重松は、いったい何に辟易していたのか。

まず、重松は、矢須子に関する噂に心を削られていく。どんな流言蜚語も立ち消えるのに、これだけは消えなかったからだ。それは、狭いコミュニティの中で生きる生活者それぞれの防衛本能が、過剰にはたらいたせいかもしれない。

戦後五年ほどなら、まだまだ混乱のさなかにある。原爆病の研究はさほど進まず、情報も十分ではなかっただろう。また、人々は、戦中、情報が操作・抑制されたことによる思考停止と疑心暗鬼から抜け出せずじまい。

重松は、この疑念を晴らそうと躍起になる。本来理知的な人物であるのに、その行動は整合性を欠くほどだった。結果、行動はすべて裏目に出て、縁談はことごとく破談となる。矢須子に罪も落ち度もないことは、誰もがわかっている。噂は、正しくないかもしれない。しかし、彼女と縁を結ぶ当事者となったとき、その高潔さを保てるだろうか。

おばになってみてわかるが、子供たちは、いつまで経ってもかわいいものだ。

だからこそ、「楽に」幸せになってほしいと願うし、その願いがかなうなら、どんな苦難もいとわない。滑稽だ、醜悪だとあげつらわれてもかまわないとさえ思う。

矢須子と結婚すれば、重松の苦労を夫やその家族も背負うことになる。幸せな新婚の時期にあっても、噂が立つたびに説明し、それを消して回らねばならない。生活はきれいごとでは営めない。正論、美談の通じない場面があるからこそ、守る者は、敢えてその「醜悪さ」をさらすのだ。

次に、矢須子との別離だ。原爆病を発症した矢須子は、心を閉ざし、重松の元を去ってしまう。このときの重松は、なんともやりきれない思いだっただろう。矢須子の苦しみは、重松の情け深さに端を発しているからだ。

重松にとつて矢須子は、負い目を感じるだけでなく、苛烈な体験を共有した、かけがえのない存在であった。だから、どんなに彼女に疎まれようと苦にせず、寄り添おうと決意していた。それなのに、矢須子の実父の言葉が、重松を深い失望に追い落とす。実父は、矢須子に寄り添うそぶりもなく、彼女の入院費を実家でまかなうと言ってきたのだ。

ここで重松は、矢須子も含め、矢須子に関わるすべての人たちに明らかな「辟易」の念をおぼえたのだろう。どんなに思い入れが深くても、それは誰にも届かない。どんなに力を尽くしても何も変えられない。そんな強い疎外感・無力感に襲われたのだ。

『黒い雨』は、重松の視点で展開されている。だから、矢須子や実父の真意はわからない。彼らの言動には、重松への感謝や遠慮が込められていたのかもしれないが、それもまた、重松には届かないのだ。

今年には戦後八十年。被爆者は十万人を切り、その平均年齢は八六・一三歳となった。これは、当時幼かった人たちの体験すら聞けなくなっていくことを示している。

我が国は交戦権を有しないが、それは戦禍から完全に免れることを保証するものではない。戦争は、多くの分断と断絶を引き起こし、あらゆる人の「醜悪さ」をさらけ出す。そして、終結後もなお、人間を試し続けるのだ。

私たちが平和を希求するのは、人間の醜悪さを目の当たりにして、失望、絶望しないためだ。だからこそ、戦争を忌避する心とその努力を保ち続けなければならない。

『黒い雨』には、市井の人々が綴るエゴドキュメントを通じて、戦争が、人々の生活やその心を蝕むさまが生々しく描かれている。もう二度と自らを嫌悪せぬためにも、『黒い雨』を読み継ぐ意義があると思う。

* 「黒い雨」(井伏鱒二・著／筑摩書房・刊)

《「黒い雨」の部・優秀賞》
想いを受け継ぐ

神石高原中学校・三年 天野 あまの 一花 いちか

『黒い雨』を選んだきっかけは、文豪が好きという気持ちだった。ある日突然文豪沼にはまった私は次々と文豪の本を読破していったが、井伏鱒二の『黒い雨』は戦争の本ということもありその事実に触れるのが怖かったり壁を感じたりしてなかなか手を出せずにいた。だが、読書感想文に《黒い雨の部》があることを思い出し、挑戦してみることにした。

この作品は、主人公・閑間重松が姪の矢須子の縁談を進める為彼女が被爆していない事を証明しようとする。しかし矢須子は「黒い雨」を浴びており、やがて原爆症を発症。重松は証明の為矢須子の日記を清書しながら彼女の回復を願う、という話だ。

この本を読み進めて行く内に、私は胸を抉られる様な衝撃を受けていった。思わず目を背けたくなる描写、文を見ただけで生々しい絵が浮かぶ苦痛。読み始めた時程の余裕も無くしながら、何とか最後まで読み切った。

「上半身だけ白骨になったもの、片手片足のほかは、みんな白骨になったもの、俯伏せになって膝から下が白骨になったもの、両足だけが白骨になったものなど、千差万別の死体が散乱し、異様な臭気を発している。」

これは私が生々しいと感じた表現の一つだ。千差万別の死体が散乱、という事は、一つの原因でそれだけ亡くなった人がいたという事。見渡す限り死体だらけだったという事。行く先でこんな目に遭うなど想像もしたくない。

他にも、疎開先から戻って来ていた男の子が脚榻に登り、木に生っている柘榴の実一つ一つに口を近づけ、

「今度、わしが戻って来るまで落ちるな」

と云い聞かせている時に爆風が起り、塀が倒れ、脚榻がひっくり返り、塀の瓦か土かに打たれて即死したという描写があった。原爆はこんなに無邪気な子供さえも壊してしまうのかと悲しくなった。

私は、辛い過去だからこそ忘れない様に実際にこうして読んでリアルを感じる事が大切だと考えた。私は広島県に住んでいるから平和学習等で多少知って

はいるが、祖父母から聞く事も無く戦争に関わる事に触れる機会も少ない為現実味が無い。衣・食・住、そして平和。何でも大体手に入る様になったからだ。『黒い雨』では原爆によつて只の塵と化した町や生物の事と、原爆症に苦しむ人達の苦悩や人が死ぬ辛さを細かく描いている。当たり前のものは当たり前前にこれからもずっと在り続けるのでは無いとリアルに痛感させられた。

もう一つ心に残った描写がある。焼け跡を歩いてきた重松達がある母子を目にする所だ。死んだ母親の傍で三歳程の少女が不安そうに重松達を見ていた。重松はその少女をどうする事も出来ず通り過ぎた。感情に蓋をするしか無かったのだ。戦争により、人の感情が欠落し、そうでもしないとそもそも生きていけなかった。戦争というものの不条理さがそこにはあった。このような戦争はあってはならない。やはり私は思いやったり助け合ったりそんな心の交流があつてこそ人間だと思ふ。だが起こってしまった事を悲しみ続けるだけでは前に進んでいけない。事実から目を逸らさない。そして、これから先の歴史に再び刻まれる事があつてはならないと強く思う事が大事だと思つた。

「今、もし、向うの山に虹が出たら奇蹟が起る。白い虹でなくて、五彩の虹が出たら矢須子の病気が治るんだ」

私は、この言葉が大切だと思う。重松が前に見た白い虹は、太陽を一直線に貫いていた。これは兵乱の起る天象である。だが五彩の虹は、夢や未来への希望といった明るい意味がある。だから、「白い虹を嘆くよりも、五彩の虹に希望を見出す」。こんな意味が込められている言葉なのだと思つた。決して叶わないと分かつていても願わずにはいられないだろう。少しの希望でも、と求めてしまふ。それは、私達が事実をしつかりと受け止め、戦争の悲劇を繰り返さないで欲しいという井伏鱒二の願いでもあつたと思う。私は、この想いをしつかり心に刻み、受け継いでいきたい。

* 「黒い雨」(井伏鱒二・著／新潮社・刊)

令和七（二〇二五）年度神石高原町読書感想文コンクール 総評

審査委員長 山 元 隆 春

（広島大学教授）

先日、角田光代さんの『方舟を燃やす』（新潮社、二〇二四年）という四〇〇ページほどの小説を読みました。中心人物の柳原飛馬（やなぎはら・ひうま）と望月不三子（もちづき・ふみこ）が出会った一九六七年から二〇二二年までの出来事が、それぞれの視角から交替で描かれていきます。男性は鳥取で、女性は東京で同じ頃に生まれ育って、成長し、結婚し、子どもをもったりもたなかったりする、その人生が細やかに描かれます。一九六一年二月生まれのわたくしにとって、『方舟を燃やす』の登場人物たちの出会った出来事は他人事に思えません。自分のこれまでを写し出す「鏡」のようにも思えます。しかし、わたくしにとって『運舟を燃やす』は完全な「鏡」でもありません。

角田さんは登場人物が周囲との関係のなかでどのように成長していくのかを丁寧に描く作家です。『方舟を燃やす』を読み進めていくと二人の人生に読者の私も引きずり込まれていくこととなります。登場人物が過去の出来事を回想する場面にも、幾度となく出会いますが、その場面では読者のわたくしも登場人物の記憶を共有しているような気になって、その時その時の登場人物の判断に共感を覚えていました。ゆっくり読みながらまるで二つの人生を生きるかのような体験です。二人の生活の場所が近づいてきて、もしかすると出会うかもしれないと、ドキドキしてしまいました。読むことは、何か恐れたり決断を迫られたりしないで、他人の心の中にすっぽりと入り込むことができる数少ない方法の一つです。二つの人生とその記憶を両方とも持つことができるのは、他ならぬ読者の特権なのです。

他人の心の中になど現実には入られません。少なくとも私は『方舟を燃やす』という小説を読んで、身近な友だちや家族、同僚だけでなく、登場人物がそれまでまったく知らなかった人たちとの出会いと別れを繰り返す、登場人物たちの不思議な関係を体験することができました。わたくしの人生を生きるだけでは出会うことのできない出来事がそこにはあります。自分とは異なる登場人物の人生を体験することは、読者であるわたくしにとって「窓」となります。

こういうことは『方舟を燃やす』の読みに限りません。ファスト文化全盛の時代ですが、スローに（ゆっくりと）読むことで、一人でいるとなかなか気づくことのできないことを知る「窓」や、自分のこれまで・いま・これからを映し出す「鏡」を手に入れることができます。単に感想を出し合っただけで、本や文章とは無関係なことについておしゃべりをするのは、けっして本や文章やその著者と「対話」することにはなりませんし、本や文章について友だちと「対話」することにもなりません。読者反応を生み出す本や文章の仕組みを捉えながら、それが自分たちの読みや解釈とどのように関わっているのかということを考えて、時に友

だちの意見に対して質問しながら、読み直す。その繰り返しが必要です。その繰り返しによって読者は読む行為に没頭する喜びを味わうことになるのです。

作家の多和田葉子さんは次のように言っています。

ひとつだけ、おかしいのは、わたしには登場人物たちの心の中まで見えるのに、彼らにはわたしの姿が見えないということだった。読者のわたしは存在しないのだった。自分をすっかり忘れて、別の人生に百パーセントかかわっている。部屋の隅に身体をまるめて読書しているわたしの身体から魂が離れて、違う時代の違う世界に跳んでいったのだ。読書に没頭していると、このように魂が身体を離れていってしまう。自分を忘れるということは、自分から逃げているのとは違う。むしろ自分を忘れて他人の生に没頭できれば、自分自身を離れたところから見るようになるし、他人の身になって考えることができるようになる。(多和田葉子「本は麻薬」 岩波書店編集部編『読書という体験』岩波文庫、二〇〇七年、一六〇頁)

多和田さんの言う「没頭」をわたくしも角田さんの小説を読むことで経験しました。「自身を離れたところから見ることも」「他人の身になって考えること」も経験することができたように思います。その「没頭」は他の読者ともどこか似ていて、どこかが違っているはずです。他の読者と話してみたり、文章にしてみたりするとそれがわかることでしょう。そのことによって新たに得られた気づきが読むことの「喜び」を増幅します。読書はその「喜び」を味わうために営まれるものであり、その「喜びを味わう読み」を聴き合う機会をたくさん持つことでわたくしたちは読者として自立することができるのかもしれない。

応募いただいた作品はいずれも応募者の皆さんの「喜びを味わう読み」の成果です。これからも、人から薦められたり、自分で選んだりしながら、本や文章と出会い、読む喜びを味わってください。その「喜び」を私たちに届けてください。

【小学校三・四年生の部】

《最優秀賞》

宿題をわすれるって、大へん（神石小学校三年生 高石七海）

この感想文は、山本悦子の『先生、しゅくだいわすれました』（童心社）という小学生の学校生活を舞台とした物語を読んで書かれました。宿題を忘れてしまい、その言い訳をする「ゆうすけ」に、「えりこ先生」は「だめだなあ、ウソをつくならもつと上手につかなくちゃ」「すぐばれるようなのはだめよ。それから、聞いた相手が楽しくなるようなのじゃなくちゃ」と思いがけないことを言います。そこから子どもたちは交替で宿題を忘れてその理由を考えることになるのです。

高石さんは、宿題を忘れた理由を考えるのに二時間以上もかける子どもの姿を見て「これなら、宿題をやってきたほうがかんだんだな」と思うようになりました。宿題が楽しくなる「理由」を考えることが宿題の代わりになるというユニークな発想を中心とした物語です。高石さんの感想文が優れているのは、一緒にこの本を読んでくださったお父さんとの会話が生きているところです。お父さんとのやりとりによって、『先生、しゅくだいわすれました』の「えりこ先生」の考えを深く掘り下げて、宿題をやることそのものよりも、それを忘れた理由を、聞いた相手が楽しくなるように考える方がもつと大へんなことになる気がします。家族とのやりとりを通じて、物語の登場人物の言葉をそのまま繰り返すのではなくて、深く推論しているのです。大切な人と一緒に読むことで、読書することで得られる喜びが何倍も豊かになるということを教えてくれます。

《優秀賞》

たった二度はこわい二度（油木小学校四年生 柳原美波）

この感想文は、キム・ファンの『たった2℃で：地球の気温上昇がもたらす環境災害』（童心社）という、地球温暖化が私たちの世界に及ぼす影響を読んで考えたことを述べたものです。地球の気温が「二度」上がるだけで、大好きな「ゴマファザラシ」に会えなくなるのはどうしてか、この本の内容を自分の関心に引きつけて見事にまとめてあって感心しました。それだけではありません。柳原さんの想像力は、たった「二度」の気温上昇が、自分の身の回りをどれほど劇的に変化させていくのかということを具体的に描き出していきます。

この本のメッセージをきちんと受け止めた感想文でした。著者のキムさんが書いている「環境災害」が他人事ではなく、自分と自分の身の回りに迫ってくる切実な問題だと柳原さんが強く感じているからです。感じるだけでなく「植物性食品を育てること」「リサイクル」「節電」、環境を守るために「声をあげること」等具体的な対応策が記されていて、柳原さんがこの本を読んで何をやりたくなったかということが明確に書かれています。私たちが「環境」とどのように付き合っていけばいいのかということも、この本から読み取って、よく考えておられるのがわかります。読書が、自分たちの明日を住みやすいものにする行動につながっていくのだということも教えてくれます。

【小学校五・六年生の部】

《最優秀賞》

人生を豊かに生きていくヒント（神石小学校五年生 竹安のどか）

この感想文は、ルイザ・メイ・オルコット（小松原宏子訳）『若草物語（10歳までに読みたい世界名作）』（学研プラス）を読んで、この物語に登場する人物たちの生き方に覚えた感銘をもとに書かれたものです。四人姉妹が、戦場に行った父親の無事を祈りながら、母親とともに、困難を乗り越えつつ成長していく姿を描いた物語ですが、竹安さんは登場人物一人ひとりの姿に自分を重ねながら読み、考えていきます。「物事にはいろいろな見方ができ、それに対して人それぞれにいろいろな感じ方、考え方があると知っていることが大事なのだ」をはじめとした感想文中の竹安さんの深い言葉にハッとさせられます。

自分の生活を振り返り、しっかり考えるためのヒントを見出しているところが素晴らしいと思います。幸福とは何かという問題は難しい問題ですが、筆者はこの物語に出てくる姉妹の生き方から、これからの人生を心豊かに生きて、幸福を手にするための重要なヒントをもらっています。『若草物語』という物語の働きかけにとっても誠実に応えておられます。物語を読むことが読者の人生に何をもたらすのかということがよくわかる文章です。

《優秀賞》

自分の色の世界（油木小学校六年生 柳原莉子）

この感想文は、志津栄子の『ぼくの色、見つけた！』（講談社）という色覚障がいをもった「信太郎」という人物を中心とした物語です。自分と同じ障がいをもっていたと言われるファン・ゴッホの絵画と出会って、信太郎は「自分の色」「世界の美しさ」を見つけていくとします。柳原さんはこの信太郎の姿にひかれていきます。

愛犬との散歩中の信太郎の「世界が変わった？ いや、そうじゃない。世界はこんなにも美しかったのに、今までのぼくが知らずにいただけだ」という言葉に感銘を覚えた柳原さんは、「景色」が「自分なりの世界」になるということは、この世界の見え方が変わっていくということに気づくのです。柳原さんは「信太郎」の世界を自分の生きる世界に重ね合わせながら、自分の周囲を新しい目で見つめ直し、新たに意味づけ直していく方法を見つけました。読書を通して、そのような発見に至ったのは驚くべきことです。「自分の色」を見つげるために、世界を一日中見つめながら熱烈に絵を一日に何枚も描いていたというゴッホと、発見した「世界の美しさ」を「自分の色」で描いていく信太郎と、夢中で読書しながら「自分の色の世界」を見つけようとする柳原さんが一本の糸でつながっているようです。

【中学生の部】

《最優秀賞》

終わりになき旅（神石高原中学校三年生 小塩清花）

この感想文は、クルム伊達公子の『進化する強さ』（ポプラ社）が、四一歳で再びテニス界に復活した自らの「強さ」の秘密を自ら記した本を読んで書かれたものです。自分自身がソフトテニス部に所属している小塩さんが、若い頃からテニス界を牽引し、一旦引退したのち四十代で第一線に復帰したクルム伊達公子さんの言葉に向き合い、自分自身の日々の暮らしと重ねながらその「強さ」を理解していることがよく伝わってきます。「現実世界を一時的に忘れ、まるで自分がその状況になったかのように」感じながら読んだという言葉に、筆者がどれほどこの本に没頭していたかということがわかります。「人生は終わりのない旅をしているようなものなのだ」という最後の一文が冒頭と呼応していて、筆者がこの本に没頭することで何を手に入れたのかを伝えていきます。「テニス」を通じてクルム伊達さんが残した言葉は、小塩さんにとって「テニス」だけのことではなく、自分のこれからの人生を強く励ますものとなったのでしょうか。それはこの感想文の読者への励ましでもあります。

《優秀賞》

「宙をわたる、学びの光」（三和中学校 中原冬生聖）

この感想文は、伊与原新の『宙わたる教室』（文藝春秋）という小説から中原さんの受けた感銘を軸としたものです。この小説に没頭した時間に頭のなかに起こったことが、こまやかに表現されて素晴らしい文章になっています。伊与原新作品の特徴が、登場人物の造型や描写やテーマ設定といった多彩な角度から探究されていて読みごたえがありました。たとえば、「専門的な知識が丁寧に解説される度に、私もまたまるで彼らと一緒に実験室にいるような臨場感を味わえた」といった記述は伊与原作品の特徴とその味わいを伝えるものです。科学知識に裏付けられた叙述の確かさ以上に、登場人物たちが自分を発見しながら自らの「居場所」を見出していくドラマが緻密に描かれているところにこそ中原さんは伊与原作品の魅力を見出しています。読書体験を通して筆者が心のなかに「暖かくも強い光」の灯る経験をしたという、冒頭の表現がとても素敵だと思います。伊与原作品への愛を語りながら、この感想文は『宙わたる教室』の新しい読者を生み出すものです。

【高校生一般の部】

《最優秀賞》

「君たちはどう生きるか」を読んで（油木高等学校一年生 田川斗哉）

この感想文は、吉野源三郎の『君たちはどう生きるか』（マガジンハウス）という何世代にもわたって読み継がれてきた名著に、新しい息吹をもたらすものです。吉野源三郎が呼びかけるメッセージに読者としてしっかりと対面したことがよく伝わってきます。「コペル君」の出会った出来事を、他人事としてでなく、自分事として考えながら読み進めていった過程

を誠実に描いているところが素晴らしいと思います。「今の時代、インターネットで簡単に答えが手に入りますが、本当に大事なものは、その答えをどう受け止めて、自分の中でどうかすかだと思えます」と言い、「そのためには、やはり自分の頭で考える力が必要です」という田川さんの言葉には説得力があります。この本のメッセージが古びておらず、現在でも多くの読者を得ている秘密を田川さんの考察は教えてくれます。この『君たちはどう生きるか』を、大人になってから「読み返したい作品」と捉えているところは、読者としての田川さんの炯眼だと思えます。

《優秀賞》

「キノの旅」を読んで（油木高等学校一年生 高木 樹）

この感想文は、時雨沢恵一の『キノの旅』(KADOKAWA)を読んで書かれたものですが、「私がこの『キノの旅』という本を読むのは実はこれが九回目になります」という冒頭の一文に驚かされました。「朝の読書」で漫画ばかり読んでいた高木さんが、先生から小説を読むように促されたのがきっかけで図書館にあった「分厚い本」を手に取ります。それが『キノの旅』の一冊だったのです。

この感想文には、九回の再読に至る過程が丁寧に述べられています。繰り返し読むなかで、この本の魅力に筆者が気づいていく様子がしっかりと書かれていて、この本との出会いをきっかけに読むことに夢中になっていく姿がそこにはあります。高木さんは「私はこの本を読んで、初めて文字だけの作品の面白さに気づきました」と書いています。それに続けて「小説はこんなに面白いんだと思い、この作品以外の作品も読んでみましたが、これを超える作品はありませんでした」とも言います。実感のこもった言葉です。読むことに夢中になることで、自分にピッタリの本はどういうものかということが見えてくるのだということをお話してくれる言葉です。そして高木さんが自立した読み手になるきっかけを確かむことができましたことを伝えてもいます。

【黒い雨の部】

《最優秀賞》

『黒い雨』を読み継ぐ意義（中原淳子）

同じ本でも、読む時期によって読者が抱く感想は大きく違うものです。そして、人生経験を重ねることによってはじめて見えてくる、その本の意味というものがあります。大江健三郎さんでさえ「自分は四十歳になってはじめて夏目漱石作品とやっと出会った」と語ったことがあります。この「やっと出会った」は初読という意味ではありません。「やっとわかってきた」という意味です。

中原さんのしっかりとした感想文『『黒い雨』を読み継ぐ意義』は、この大江さんの言葉を彷彿とさせるものでした。井伏鱒二独特の「辟易」という語の使い方をはじめとして、『黒い雨』の一語一語に、中原さんは自らが高校生の時にこの作品に抱いた感想とは異なる新し

い意味を発見しておられます。人生経験を積んだ後の「再読」であるがゆえのからこそ、この小説の表現に関する新しい意味の発見が随所に見られて、とても深い内容になっています。現代世界の問題とこの小説の内容を関連づけながら、そして『黒い雨』を読む「自身の今と重ねて感想を述べて行かれる筆致は確かで、読み終えて大きな感銘を覚えました。タイトル「読み継ぐ」には、自分自身の「読み継ぐ」と、世代を超えて「読み継ぐ」の二重の意味合いを捉えることができます。そういうところも、この感想文の優れたところですよ。

《優秀賞》

思いを受け継ぐ（神石高原中学校三年生 天野一花）

天野さんは『黒い雨』という小説の叙述のなかで、自らが読者として心を揺さぶられた部分を適切に引用しながら、この小説についての解釈をしていきました。「当たり前前のもは当たり前前にこれからもずっと在り続けるのでは無い」という言葉に代表されるように、「黒い雨」を読むことを通して得られた実感が誠実に言葉にされています。

「今、もし、向うの山に虹が出たら奇蹟が起る。白い虹でなくて、五彩の虹が出たら矢須子の病気が治るんだ」という重松の言葉に「白い虹を嘆くよりも、五彩の虹に希望を見出す」という意味を捉えているところには、この作品の読者としての天野さんの強く切実な願いがあらわれています。その願いは、『黒い雨』を著した井伏鱒二の「思い」を受け継ぎながら、それを忘れてはいけけない記憶として、自分より後に生まれた人々に注いでいこうとする意思のあらわれでもあります。自分が生きる今とは違う時代の違う世界を描く言葉から、大切なメッセージを受け継ぎながら、それを次の世代に伝えていこうとする強い思いのあらわれです。そこに強い感銘を覚えました。